

月の花挽歌 ～8. 人情紙風船～

8.人情紙風船

8 - 1

クリスマスイブ迄には二週間ほど早かったけれど、立て続けにシャンパンが開けられると、顔ぶれも相まって、そこの席だけがフォローピンスポットライトで浮かび上がった舞台の一場面さながらであった。

銀座でも有数のクラブで遊んでいるんだという常連客にとっては、否応なくステータス感をないがしろにされたようで、その場に居合わせたことが不運だったのかもしれない。

真紀にとって銀幕の大女優Kの来店は歓迎すべき意外な出来事だったけれど、それにもまして、『フラワーベッド』の令子がKを友人然として連れ立って来てくれた行為そのものが無性に嬉しかった。

真紀にはKと令子の関係がパリであることは容易に想像できたので、初対面のTたちには、敢えて令子の紹介をしないでした。

Tたちも、令子のことをKの連れとして存在感そのままを自然な流れで迎え入れた。

「Kさんがルポされたテレビ番組『とびっきりフランス旅』を観ました。長年いらっしゃるだけのことはあって、案内されたパリやプロバンス地方に行ってみたい気分させられました」とTが思い出したように言った。

「ぜひ、いらして！スケジュールが合えばご案内しますわ」とKはローズピンク色のシャンパンをスチール写真のごとく一口飲んでから潤いを含んだ声で言った。

「本気にしちゃいますよ……。それにしても色々なフィールドでご活躍されているのを見ていると、私もいい刺激になります」とTは眩しそうな眼をKに向けて言った。

「これでも、自分を見失わないように必死なんです。400年前に建てられた家で一人暮らしをしていると、時間の観念が無くなって、怠け癖がついてしまい、足元から朽ちていくのさえ気づかなくなってしまうのではないかと恐怖心に苛まれるのです。時間に身を任せて老いに抗わずに生きられたら良いのでしょうかけれど、困ったことに悪あがきの血が騒ぐのです」とKはパントマイムを交えて道化た口調で語った。

「400年ですか！それがパリなんですね」と長身の俳優が、彼なりの視点で感心する。

「恋をするのも悪あがきなんではないでしょうか？」

とKの一つ一つの言葉に耳を傾けていた女優が外連味のない言いつぶりで唐突に尋ねた。